

08シドニーWYD 感想

札幌教区教区司祭 森田健児

- ・初めてのシドニーは、町並みや自然などいろいろと印象深いものがありました。天気には恵まれ、とりわけ、シドニー湾の夕焼けは美しかったです。十字架の道行きで、会場に設定された十字架に、俳優のキリストが上げられてゆくクライマックスのとき、背後にはこのまぶしい夕焼けがあり、絵のようでした。
- ・多くの若者はそれぞれに感動し、多くのものを得ていたようです。わたしはといえば、自分が感動するより、感動する青年たちを見ていた感じで、司牧者・世話係としての自分がいました。
- ・今回わたしは鹿児島奄美大島や徳之島、また沖縄の青年など、南国の青年たちと妙に親しくなりました。ホームステイでの同室も鹿児島教区の司祭で、南国特有の顔立ちとさっぱりした気質の方でした。
- ・松浦司教はホテルにも泊まらず、すべてのプログラムを青年たちと共有し、共に歩き、共に食べ、共に野宿をしました。その姿にも教えられません。
- ・札幌教区から参加した4人の青年たちも意識が非常に高く、誇りに思いました。それぞれに神から多くの恵みをいただきました。いろいろな信者の方が祈っていたことを、後で知りました。関心を持って祈ってくださった多くの教区の方々に感謝したい気持ちです。

WYDがくれたもの

札幌地区カトリック北11条教会 名和 泰広

「WYDに行った感想はどうですか？」

帰国してからそう聞かれる機会がしばしばある。その度に僕は言葉に窮した。このイベントが与える印象を正確に表現できる言葉。それを見つけることができないのだ。楽しかった・驚いた・辛かった・感動した。どれもWYDの一面を表す言葉だと思う。しかし本質とは異なるものだ。

おそらく行った者にしかわからないであろうあの非日常感とはもはやそういった言葉での表現を超越している。僕はその点にこのイベントの価値があると考えている。楽しみ・感動・辛さなどの気持ちはわざわざ海外まで赴かなくても

日常が与えてくれる。異文化体験さえもその気になれば国内である程度経験することができるだろう。そのような自分の理解下にはない WYD での体験は、必ず強い刺激となってその人を揺り起こすと僕は思う。そのほんの一例として自分の体験談が少しでも参考になれば幸いである。



出発前、僕の WYD にかける意気込みはとても強かった。極めて具体的な参加動機があった、というわけではない。しかし必ず自らを成長させる何かがある。そう信じて疑わなかった。特に根拠はないのにある種の期待感が自分を強く後押ししていた。

帰国後まもなく、僕は呆然としていた。軽いショック状態のようなものだったかもしれない。WYD へ行ってきたという高揚感のみが自分を支配していた。しかし次第に興奮は冷め、再び現実へと目覚めていくうちに焦りが生じるようになる。家族からは以前と人間的に何ら変化がないと指摘された。このことは自分を失望させた。以前と何も変わっていないのか？しかし言われてみればそうだ。何か革新的な活動を始めるともない。いわゆる聖性なども一切身に付いていない。

「僕は時間もお金もつぎ込んで何のためにわざわざ豪州まで行ってきたのだろうか？WYD は必ず何かを得て帰ってくると自らに誓った巡礼のはずだったのに…。こんなのはおかしい！」そのような考えがしばらく頭から離れなかった。あれだけの体験を積んだのに人間として成長できていないと感ずることが、歯がゆくて仕方なかった。

あれから半年近く経つ。その間に自分の中の思いは様々に変化し続けてきた。そしていま、一つ得ることのできた確信がある。それは「感謝」の念である。

自分自身がどんな素晴らしい人間へ変貌したかという観点から WYD の恵みを考えることに僕は限界を覚えた。確かに WYD は種々の特別な体験を提供してくれたかもしれない。しかし、僕はその全てが再び日常に戻ったとき、全く以前と同一の自分が同じ場所に立っていることにハッとした。

その一方で僕は自分の周囲の見え方が変わっていることに気が付き始めた。WYD という非日常の経験は日常を新しく見せた。恥ずかしながら自分は非常に

傲慢な性格で、心底相手の気持ちを考えることなく自らの意志を優先させる人間である。その自分がだんだん気付くようになった。この人たちは僕にこんなにも優しく接してくれていたのか、この人たちに僕はあんな失礼な態度で接していたのか、と。その時、僕はその日常を支えてくれる人の存在の大きさに、生まれて初めてと言っていいと思う。感動を覚えた。存在に感動というのは妙な表現かもしれないが、何とも言えない強い親しみの感情が沸いた。この人たちがいてくれてよかった、と心底思った。そして同時に自分という存在の卑小さを感じ、申し訳ない気持ちになった。

その時に初めて、僕はこの WYD で頂いた恵みが何だったのかおぼろげながら教えられた気がした。自分の意志で行ったと思っていた WYD、自分が変わろうと計画していたこと。全て見当違いだったように思う。僕が行ったのではなく僕は呼ばれたに過ぎない。僕は変わる以前にまず気付く必要があったのだ。

イエス様は最も大切な教えとして隣人を愛することをお命じになったが、そのことは今自分にとって説得力を持つようになった。大会中のカテケージスでも言われていたが全ての人と愛し合う状態があるのなら、それこそがまさしく天国だと思う。

また、イエス様は同時に神を愛するようにもおっしゃった。僕には神が見えないし、何も聞こえない。その神に感情を抱くということは難しいことだ。よく疑った。本当に存在するのか？しかし今回の WYD を経てその部分でも自分の考えは少し変わった。神がいるという確信がなくても、神が望む心から隣人を愛するという生き方に徹底できるのならそれは幸せだと思う。そして方法こそ色々あれ、人を大切に作る姿こそ最も「神」という存在を確信させられる方法なのではないかと感じる。だから、神の存在証明はできなくても自分の納得できる生き方のために信仰を大切にしたいと思う。

また、このような神や人とのつながりといったことを意識するようになるうちに自分という存在を「個」としてではなくいわゆる「共同体」の中の一部と感じるようになってきたように思う。そのことによって知らず知らずのうちに築いてしまっていた独善という固い殻から少し抜け出ることができた気がする。一個人としての特別さを求めるよりも共同体としてお互いに支えあっていく方が人はよっぽど幸せに生きられるのではないだろうか。

WYD は何が何でも経験する必要のあるものではないと思う。行かなかった人は必ず別の場所で神が必要な体験を与えてくれているはずである。もし呼ばれたら、ただ従えば良いのだ。次の大会の参加者たちには肩肘張らずに自分の感じるまま WYD を体験してきてほしい。必要なものは、自分の意志を超えて頂くことができるのだから



恐れずに勇気をもって

旭川地区カトリック砂川教会 西川 武志

《はじめに》

聖霊の導きのままに、おそろおそろ身をゆだねた結果、WYDに参加する勇気につながったと感じています。“勇気”わたしの力ではない方のおかげで今、生きられている事に感謝し、イエス様にいただいた賜物を育てさらに次の世代に伝えることが使命と思い、今回の行動になりました。わたしは成人洗礼ですが、短い時間で本当に多くの賜物を霊的指導者であるローター・ポレンバ神父に感謝の気持ちで一杯です。又、多くの神父さん・シスターブラザー・教会共同体に支えられ育て見守られている事に感謝し、今回WYD参加の機会に恵まれました。自分の置かれている環境に感謝しながら、祈りながら今後も学ぶ事が出来るように委ねる事が大切と思っております。勇気を持って学ぼう、若い人や経験者に、という思いが今の気持ちです。新しい出会い、共に信じる人と交わって経験した事をまた伝えて生きたいと思う。



「行きの飛行機で」カンザス航空便に搭乗しようとしているとき私は列から離れて困っているところを鹿児島教区の泉神父様と奄美大島の里さんに助けられ列に戻ることが出来た。エマオの弟子のようにキリストに救われた。神に感謝。

「ビックニュース」教会で寝る予定がホームステイに変わり3人から6人のグループに選別され、私は神父さんたちと信徒のチームでラッキー、安心して神に感謝。

「開会式の列に並ぶ時の憐れみ」交通規制が引かれ、私たちのいる場所からは会場に入れない事が予測された。交差点でボランティアのおじいさんに頼み込んで日本人団を横からそっと入れてもらった。見逃してくれたおじいさんに感謝。神さまの哀れみをまた受けた。

「食料確保」神父さん（アシスタントの皆さん）は必死にいつも努めてくれて本当に感謝しております。子羊が飢え死にしなかったのは司祭のおかげです。

「十字架の道行き」俳優さんが命がけで行う劇を一緒に共有する。シドニー全体が大きな聖堂となり会場はゴルゴタの丘となった。私もイエスさんが十字架を引きながら、ゴルゴタの3つの十字架の左側で見る事が出来たがとても悲しい思いだったが、私の令名は「使徒ヨハネ」なので最後まで見なければという思いで必死にみた。

「教皇ミサで聖霊降臨」世界中の若者と体験できるなんてなんて恵まれているのだろうと思い、日本で支えてくれた人々に本当に感謝。自分の生き方を問い直し逃げずに見つめる事が出来た。皆同じ道をたどり思いも一つになるためいろんな国の人々がたと混じり、歩き祈る。パパと一致しキリストと一致するため、また聖霊降臨を受けるためここに40万以上集まった。パパと夕の祈りと聖体礼拝をした。

「皆寝袋で野宿」オーストラリアは冬、日中はとても暖かく半袖で歩けるものの日が落ちると寒くなり5度程度になる。皆必死に服を何枚も着て寝袋に入り寝るものもいれば、話に花を咲かせ暖めあうものもいた。朝も寒くて2回おきたが何とか一夜を過ごせた。トイレはペーパーもあり水洗で水も完備され警備もバッチリ。ホスト国オーストラリアの底力を見たようだった。ボランティアの皆さんに本当に感謝。暖かいココアを皆で分けあったときの幸せは今もよみがえる。

「聖霊降臨ミサ」国も違いいろんな旗が振られるミサの間も、心は一つ思いも一つ。パパを通してキリストと一体となり言葉を越えた聖霊降臨が行われた。「主の平和」もいろんな国の言葉でいい互いに握手をしたり抱き合ったり文化を越えたキリストの下で集まった若者たちに祝福をしてきているようであった。

「この日の夜」私にとって忘れられない日となった。いろんな事が見え始め、聖霊降臨の息が吹きかけられたようだった。何が大切なことで今までどんなに誰が応援してくれていたのかが分かった時間だった。感謝と共に誓いを立てて浅い眠りの中、朝を迎えた

《おわりに》

司教さま方から「関係」が大切と教えられた。

「ペトロは岩、教会はその岩の上に立って決して揺るがない」事を再確認できたと思う。

仲間や神父様方に支えられ、9日間過ごした旅も終わりを向かえいろんな人と交わり交流し、助け助けられ本当に関係があった。“マリア様に出会った”と感じた。神の母聖マリア様がいかに大切でありいつも助けてくれていることに改めて感謝した。

私は若い人たちから「とにかく最後まであきらめない」という事を学び、35歳として今後、次世代に伝えられた事をつなげなければならないと強く感じた。

また、私自身、神にゆだねて生きる決心をした旅でもあった。どんな形でも使ってもらえれば最高の幸せと感じとれるように今後、信・望・愛を精進していきたい。

多くの支援をして下さった皆様、祈って下さった皆様に心から感謝し、今回の出会いも今後更に大切にして、自分の醜いところも全部受け入れて抱えて前に一歩踏み出して生きたいと感じたWYDでした。

(今でも熱が冷めなくて大変です。笑)